日の丸の旗など、深く印象に残っている。

船内はアジ演説もなく、至って無事平穏、八月七日舞鶴港に感激の入港した。ここの海軍兵舎で復員手続等でしばらく滞在して、一路故郷へ。盛大な出迎えをうけて、七年ぶりに我が家へ着く。

復員後は農業をしながら市内の会社へ勤め、妻子にも健康にも恵まれ現在に至っている。

最後に、今でも思うことは、五十年前、酷寒のシベリアで飢えと寒さに加え重労働で死没した戦友の皆さんの御冥福を心から祈る次第である。

帰国後も後遺症に悩む

長野県　伊藤菊次

昭和十年徴兵検査の結果、甲種合格、徴集免除となる。日支事変が始まった昭和十二年十一月、充員召集により松本輜重隊に入隊。一ヵ月後、南支方面に派遣されるべく広島より輸送船に乗り出港するも、英国艦隊に阻まれ、急遽台湾に変更し上陸、任務につく。三月に召集解除となり帰郷する。

昭和十六年七月、関東軍特殊演習参加の名目により再度召集を受け、金沢の輜重隊に入隊する。一ヵ月足らずで牡丹江省樺林輜重隊第四中隊に編入になる。昭和十九年五月、南方派遣の命により釜山に集結するも、戦局険しく出港を断念し原隊に復帰する。昭和十九年十月、ハイラル第一一九師団に編入。翌二十年六月より興安嶺の山中に陣地を構築。ソ連軍の進攻を迎え撃つべく準備中、終戦となる。八月二十日ごろ、博克図に集結せよとの命令により武装解除の後、博克図の収容所に入り帰国を待こととなる。

約一ヵ月後、九月十七日、輜重第一一九連隊を中心に連隊長以下千五百名の第二作業大隊が編成され、二段に仕切られた貨車に乗る。列車はなかなか発車せず、この間いろいろな話が飛び交う。日本へ帰れると言う人、いやどうもソ連へ連れて行かれるのではないか……。不安の数時間が過ぎ暗闇が迫るころ、ようやく動き出す。いずれの方向へ向かっているのか見当もつかない。

朝になり見渡せば列車は意外にも西へ西へと進んでいる。

十数日の後、列車の着いた所はクラスノヤルスク地区アバカンのチイナゴールスカヤ村と聞く。ここの半地下式のバラックに各隊別に収容される。

翌日から道路工事、水道工事などの重労働に、一部コルホーズの農場手伝いなどをやり、十日ほど過ぎて、これから炭坑へ入れと言われる。炭坑の粉塵が立ち込める中での重労働。食事らしい食事は与えられず、空腹で作業は捗らない。ノルマが達成できないと食糧は減らされる、腹が減っては仕事ができない、こんな悪循環が続く。幸いなことに我々の班は採炭前のハッパの準備、トロッコのレール敷きなどの作業に回される。この監督が親切な老人で、いろいろと面倒を見てくれ利便を計ってくれたので、ノルマも上がり食料も増配になり、時には食べ物を持って来てくれた。他の人には悪いと思いながらも、お陰で生きて帰ることができた。

二十二年四月十五日、日本へ帰すと言われ列車に乗り、アバカンを出てナホトカへ来る。いよいよ日本に帰れると喜んでいると、新青年連合と名乗る人たちが来て、日本へ帰るための隊長選挙を行えと言われる。現在の隊長を選出すると「お前たちは民主教育ができていない」と言われ、第二収容所に入れられ猛教育と労働を一週間。ようやく許可が出て乗船、舞鶴港に上陸。懐かしの故郷へ帰る。

帰国後、家業の農業に従事していたが、次第に体調が悪くなり、病院に行くと塵肺と診断され、通院していたが思わしくない。昭和三十二年五月より三十六年五月まで、丸四年間の入院生活を送り、ようやく回復はしたものの、今でも定期的に通院し、薬を欠かせない日々が続いている。あのシベリアでの炭鉱労働の影響がいまだに続くとは思いもかけなかった。しかし、あの厳寒のシベリアで日本に帰ることもできず斃れて逝った友を思えば、こうして帰国できて家族と一緒に暮らすことができただけよかったと諦める昨今である。